

— 論文 —

旧会津藩士における神社の研究

—— 琴似兵村と江別兵村の比較から ——

遠藤由紀子

A Study of Shrine in Kyu-aizu-hanshi

— from a comparative study of the kotoni soldier village (兵村) and the Ebetsu soldier village (兵村) —

Yukiko Endo

We cited as an example the Kotoni soldier village and the Ebetsu soldier village, comparing the detities of shrines in these two Tonden soldier village. In the Kotoni soldier village where many kyu-aizu-hanshi settled worshipped the ancestor of their former feudal domain as the deity of their village shrine, while in the Ebetsu soldier village, the place of worship of the Ise shrine which is representative of the country unified under the centralistic Emperor system was made to serve as a village shrine.

This indicates that kyu-aizu-hanshi for whom the Meiji era started with the defeat of the Boshin War lived vigorously, cultivating the land to build a nation, while still retaining in a new world the sense of identity as a member of their former feudal domain.

1、はじめに

明治維新の諸改革により、日本は近代国家形成期を迎える。近世においての藩士、すなわち明治時代に士族と呼ばれたものたちのこの過渡期における生活は、幕末期の政策方針や思想上の立場の違いによって異なった。戊辰戦争後、明治時代を敗北からの始まりで迎えた旧会津藩士は、近代国家形成期においてかつての藩に対し、どのような意識を持ちながら生き延びたのであろうか。

本稿では、札幌周辺に形成された屯田兵村に入植した旧会津藩士と神社の関係を考察する。屯田兵村に注目したのは、「移住」して生活の場を変えるということで、人々の意識にも大き

な変化があったのか否かがより際立っているのではないかという視点からである。また、軍隊組織の一部に組み込まれるということで、「近代国家」により密接した状況におかれるためである。

調査地域は、屯田兵制度初期の第一大隊の琴似兵村、第三大隊¹⁾の江別兵村である。琴似兵村は屯田兵制度が制定され、はじめて形成された屯田兵村である。明治8年(1876)に旧会津藩士が「青森県士族」(斗南藩士)という身分

1) 第二大隊は、明治19年(1886)から明治22年(1889)にかけて、現在の根室市に形成された東和田兵村、西和田兵村が担った。根室地域の屯田兵村には、東北・北陸・近畿地方を中心とした14府県の士族出身者が入植した。

で57戸入植した。江別兵村は西南戦争後に形成され、旧会津藩士は集団では入植していない²⁾。ゆえに、西南戦争前と後に札幌周辺に形成されたこの屯田兵村を比較する。

北海道に形成された各屯田兵村には、屯田兵村を守護する神社が必ず鎮座している。本稿では、琴似兵村と江別兵村における神社の祭神を比較する。調査方法として、琴似兵村跡地・江別兵村跡地を現地調査し、屯田兵入村から明治末期に至るまでの屯田兵村を守護する神社の勧請動向を把握する。そのなかで、屯田兵となった旧会津藩士がもつ帰属意識を神社の祭神から考察する。

屯田兵と神社に着目したのは、一般に、変化したものが多い近代国家形成期においても、人々にとって不変であったもののひとつに、八百万の神や祖先を敬い神社を大切にすることが挙げられるからである。近世までの日本にとって、氏神は神社という形で地域社会の中にあり、鎮座して「当たり前」の存在であった。人々は日々の生活のなかで、神を様々な困難を乗り越えていくための支えとし、また感謝し生活を送っていた。それは心のよりどころとなり、生きていく源となっていた。移住するということは、その「当たり前」がなくなることであった。

また、会津藩士の藩祖である保科正之は晩年にいたるまで神道を尊崇し、吉川惟足を師として専ら卜部神道(吉田神道)の教を学んでいた。寛文11年(1651)、惟足から霊号を「土津」

2) 屯田兵村は、ほとんどが200~240戸で構成される。江別兵村には160戸が入植した。そのため、近隣の篠津兵村の60戸と合わせてひとつの大隊となった。篠津兵村の入植者名簿をみると、旧会津藩士と思われる「青森県士族」(斗南藩士)7~8戸が入植している。江別兵村の入植者名簿には「青森県士族」2戸の入植があるが、斗南藩士という記録が残っていないため、旧会津藩士かの判別が難しい。よって、江別兵村については、旧会津藩士の「集団」の入植がなかったということで論じていく。

と奉られた。正之の死後は、藩祖として土津神社に祀られ、会津藩士はこの神社を氏神として、幕末に至るまで強く崇拝していた。正之の定めた「家訓十五条」は会津藩士の精神的支柱となり、正之に対する忠誠心は高いものがあつた。幕末期には、時の藩主松平容保が「家訓十五条」に徳川家に忠誠を尽くすという条項があるために、他藩が敬遠した京都守護職の任につくことを幕府から命じられた。会津藩は、この家訓の存在のために戊辰戦争で朝敵となる立場となった。それほどに、藩祖という保科正之の存在は幕末期に至るまで会津藩士の忠誠を貫く対象であつた。

会津藩は屯田兵として移住する前に、戊辰戦争の敗北により滅藩し、明治3年(1870)に斗南藩(下北半島周辺)へ移封となり、移住を余儀なくされた。この際には、斗南の地で「意気消沈する家臣たちの士気を鼓舞するためのもと、斗南藩士の精神的支柱となれと、藩祖保科正之を祭神とした土津神社の斗南遷宮」(猪苗代町編1982:327)をしている。

屯田兵として北海道に移住することは、氏神として信仰してきた神社が生活する土地に存在しないことでもあつた。近代国家形成期における神社の情勢と人々はどのように神社とともに生きていたのかを追うことで、人々が近代国家に臨む精神的支柱が反映されているのではないかと推測する。

これまで、各屯田兵村における神社の歴史は統一された見解がなかった。本稿では子孫からの聞き取り、各市町村史の記述からその現状を指摘する。江別兵村に関しては新史料を用いて屯田兵村と神社の関係を探っていく。

2、屯田兵の設置と旧会津藩士

幕末期以来、日露関係の緊迫化により北方警備の必要性が叫ばれていたが、すでに明治6年

(1873) 1月に交付された徴兵令では、近世において蝦夷地であった北海道は適用外に置かれ、北海道の警備は空白状態であった。また、同年5月の福山・江差騒動³⁾は、道内の治安維持能力の欠如を露呈していた。そこで、開拓次官となった黒田清隆は、北の守りと北海道の進展のため土地を開く定住の労働力の必要性と戊辰戦争で敗れた東北諸藩の貧窮藩士の授産政策とを結びつける建議を打ち出した。

この建議を受けて、同年12月に太政官は屯田兵制度の創設を認可し、明治7年(1874)6月に黒田が陸軍中将兼開拓次官に任命され、北海道屯田憲兵事務総理となった。黒田が陸軍省と開拓使の役職を兼ねることで、屯田兵は陸軍に準じる形で開拓使の管轄に入ったのである(三浦2000:35)。

政府は、北海道へ士族の移住をすすめ、同年10月に「屯田兵例則」が制定され、翌年から士族を送り込むことに成功した。屯田兵制度は、士族授産政策の一環として、北海道の開拓とロシアからの脅威を防ぐための北辺という地理的な環境の結果、設けられたのである。

屯田兵制度の募集は明治32年(1899)まで行われ、日露戦争勃発後7ヶ月を経た明治37年(1904)に第七師団司令部直属の軍隊となり、屯田兵という特別な編成の軍備は廃止される。廃止の原因となった根拠は「時代の進歩しないこと(憲法義布^(マ)以来の権利義務による不合理)、地方自治の確立(町村制の公布)、徴兵制の実施と第七師団の成立」(増田1962:93)といわれている。北海道に誕生した兵村は、実に37村にのぼる。創設から廃止まで入植した屯田兵は7337名、家族を含めると、その数は4万人以上になるといわれる。

3) 道南の桧山地方の漁民が徒党を組み、減税を嘆願した一揆。黒田清隆は青森の鎮台から軍隊の出動を要請し鎮圧した。

はじめの屯田兵募集は、次に挙げる4つに当てはまるものを対象に行われたと分析されている。「東北出身の各藩士で戊辰戦争に旧幕府軍として戦ったもの、北海道の箱館戦争で榎本武揚に加担したもの、生活が窮乏し授産の必要があるもの、治安を乱す可能性のあるもの」(札幌市編1985:114)。このように、入植者の出身を限定したのは、明治政府にとっての不安因子を対象にしたい意図があったと推察される。

しかし、募集期限の明治8年(1875)2月末になっても、一向に応募者が集まらず、定員の半数にも満たなかったため、募集期日を3月末まで延長した。さらに明治9年(1876)移住分の募集が、明治8年(1875)8月からはじまり、宮城、青森、酒田三県のほか、布達の範囲を岩手県、秋田県にひろげた(札幌市編1985:55~56)。

上記で応募者が集まらなかったと指摘したが、これについて青森県の斗南藩士に関しては逆の傾向をたどる。屯田兵希望者は、体格検査などを受け、屯田兵として入植を認める旨の書類が通達されるが、このとき、青森県下において、屯田兵に応募し通知を受け取り北海道に入植した士族は悉く斗南藩士であったという。斗南藩士とは会津藩士のことである。

会津藩士は、戊辰戦争終結後、残党の一部は高田藩に預けられ、その他は東京へ謹慎の身となって、朝敵・賊軍と非難された。その後、下北半島に斗南藩が新設され、3万石の不毛の土地に強制的に移住させられた。幕末に4000戸あった会津藩の明治3年(1870)における離散状況について、「会津に帰るもの210戸、農商に帰するもの500戸、江戸その他に分散するもの300戸、北海道に赴けるもの200戸、陸奥の新領地に移封するもの2800戸」(石光編1971:58)といわれている。明治4年(1871)、廃藩置県により、彼らは自由の身となって、一部は故郷会津若松

に帰ったが、北海道へ移住したもの、斗南へ残留したものも多くいた。彼らの生活は依然として苦しく、新天地を求めるものが多かったのである。

当時の斗南藩士の状況について、「南部地方の荒涼たる原野に移住し、農耕に馴れざる士族は、僅かに口糊を凌ぐに足らず、為に或者は郷里に帰戻し、或者は箱館に渡航して生活の安定を図るべく困苦を嘗めつつあった。かかる際とて屯田兵の希望者が多く、8年には49人を採用して、餘は翌年移住に廻された。」(山田1944: 33)と著されている。

琴似兵村に入植した屯田兵の入村名簿(伊藤1979: 210~219)をみると、出身県が青森県士族、そして括弧内に「斗南藩士」と記載されている屯田兵がいる。これは、会津藩士が屯田兵として北海道へ移住したという事実なのである。つまり、はじめの屯田兵として、実質的には福島県も対象とした東北地方全域に及ぶ士族が入植している。

そのなかで会津藩士が、会津藩士としての入植ではなく、青森県出身として屯田兵の入植を果たしたという理由は、当時明治新政府には旧幕府軍のうち、会津藩に関してだけは、屯田兵の資格を与えないという考えがあったためである。しかし、余りの応募の少なさに会津藩士の入植を青森県出身として許したのである。その出身を隠し、会津藩士が生きるために果敢に新天地を求めた胸中が偲ばれる。ついに、「旧会津藩士」が屯田兵として北海道に入植をはじめることとなった。

3、琴似兵村における旧会津藩士と神社の関係

札幌周辺には、上述の2兵村とともに山鼻兵村、野幌兵村、新琴似兵村、篠路兵村が形成されている。札幌周辺に形成された各屯田兵村に

入植した屯田兵の出身地をみると、琴似、山鼻には戊辰戦争に敗れた東北地方の士族のみが入植したのに対し、江別、野幌、新琴似、篠路には佐賀の乱や萩の乱、西南戦争後に敗れた中国・九州地方の士族が多く入植している。

まず、最初の屯田兵として形成された琴似兵村と神社の関係をみていく。琴似兵村は現在(平成17年〔2005年〕)において札幌市西区となっており、札幌市中心街の大通公園がある大通駅から地下鉄東西線の6駅目に位置している。琴似地域には、その土地の有効性から屯田兵の移住以前にすでに入植者が存在していた。明治7年(1874)の調査では、琴似村は戸数59、人口218人(琴似屯田百年史編纂委員会編1974: 24)であったとの記述がある。

明治8年(1875)に、琴似周辺に屯田兵が入植を開始し、屯田兵村が形成された。琴似兵村へ入植したものの出身地は次のようである。「青森県8名(但し斗南藩士を除く)、宮城県100名、福島県57名(斗南藩士53名、余市〔斗南藩士〕3名、会津若松出身1名)、岩手県4名、山形県9名(募集時は酒田)、旧館藩(函館・松前周辺)11名(出身内訳東京3名、石川県2名、新潟県3名、秋田県2名、長野県1名)、北海道19名(札幌周辺にすでに入植したものの内から二、三男が分家して屯田兵に応募したも



写真1 「琴似神社 鳥居」

琴似地域の鎮守のカミとして町の中心に鎮座している。

の)」（札幌市編1985：115～116）。この分類は、琴似兵村に関する資料から各藩の出身地を現在の県別へ移して作成されたもので、斗南藩士を福島県出身として区別して記載している。

琴似兵村跡地を概観すると、屯田兵村を守護する神社として琴似神社が勧請されている。現在の琴似神社は、琴似地域の中心地に鎮座しているが、この地は明治44年（1911）に移築された場所である。（写真1）入植当時の神社の位置は、兵屋配置図をみると、屯田兵村の中心に在った。

琴似神社の鎮座に関する由来について、神社に現在伝えられている史実の概略は次の通りである。「琴似に入植した240戸の人々の有志は、宮城県亘理藩主伊達藤五郎成実公の遺徳を敬慕し、武早智雄神と尊称して山の手に東面して神祠を建立し、新神徳を北海道開拓の上に顕彰するために武早神社と号して祭祀を厚くしたのが琴似神社の創始である。その後、明治30年に琴似神社と改称し、明治44年に大国主大神を増祀し、鎮座地を現在地に移築、昭和43年に伊勢神宮内外宮の神々を拝受し、両宮の神々を増祀した。更に平成6年5月15日琴似屯田兵縁の旧会津藩祖御神号土津霊神を増祀した」（「琴似神社」由来書）。

由来書には、創立年が記載されていない。札幌周辺的神社について、『札幌の神社』『新札幌市史』『北海道神社明細帳』『北海道神社誌』『北海道神社庁誌』などからその有り様が分かる。各書その他の神社について、創立年や由来が一致しない神社もあるなか、琴似神社に関しては、どの書にも創立年が明治8年（1875）と記載されている。

新國辰男氏は、明治8年（1875）に入植した旧会津藩士である新國幸次郎の子孫である。新國氏からの琴似神社に関する聞き取りで、興味深い話がある。

それは、「明治44年（1911）に、札幌神社の大国主大神を合祀することとなった。この際、会津藩出身の屯田兵から、会津藩祖である保科正之公をともに祀りたいという希望がでたという。しかし、会津藩には戊辰戦争での賊軍・朝敵というレッテルが未だに色濃く残っていたので、簡単には認められなかった。だが、旧会津藩士の思いは堅く、祭神名を変えるということで、道庁はこれを了承したことにした。この件は、落ち着いたかのようにみえていた。時は流れ、平成2年（1990）に会津出身の人が琴似神社の宮司に会津藩の祭神について確かめたところ、神社側からの回答として神社には合祀された記録がないことが露見した。歴史書には、会津藩の祭神合祀と記載があったので、合祀されたと思いついていただけであったのである。そして、先祖に対して申し訳ないという気持ちから、会津藩祖の祭神を合祀する行動を起こした。保科正之公は土津霊神といい、現在福島県猪苗代町にある土津神社に鎮座している。幾度もの北海道と福島とのやり取りがなされ、平成6年（1994）に土津霊神を琴似神社へ合祀することが実現したという。北海道と福島の関係は今も深い交流がなされている。」（聞き取りより）ということである。

以上が新國氏の話であるが、会津藩の藩祖である保科正之が「合祀された」はずであったという認識を生みだした事実について、琴似神社に関する書から追求してみた。各書を参考に整理・作成したのが第1表である。

この第1表をみると、琴似地域の地方史にだけ、保科正之を合祀したという記述があることがわかる⁴⁾。ほとんどが、大正13年（1924）に発行された『琴似兵村誌』を下敷きにしたのであろう。

旧会津藩士は出身を隠して入植したという経緯があるため、自らの出身の祭神を祀りたくて

第1表：琴似神社に関する保科正之を祀った記述の有無

書籍名	発行年	有無	頁	琴似神社に関する記述の抜粋
1『琴似兵村誌』	1924年	○	61	「舊会津藩出身者と協議の結果大国主神を祀り伊達成実公と保科正之公とを配祀することとし、明治44年6月出願7月許可を得」
2『琴似町史』	1956年	×	519	「明治44年6月村民が協議の結果、これまでの巨理藩を中心とした神社ではなく、名実共に琴似全村民の神社にするため、札幌神社の御霊代を拝受してこれを併祭した。」
3『神社明細帳』	1952年	×		祭神について「大国主大神、天照大御神、豊受大神」との記述のみ
4『北海道神社誌』	1971年	×	5	「祭神天照大神、豊受大神、大国主大神、由緒明治8年屯田兵の守護神、武早神社として創立を許可される。明治8年無格社、明治30年現社名に変更、昭和19年郷社、昭和28年宗教法人設立、昭和43年天照大御神・豊受大神を増祀」
5『琴似屯田兵村史』	1974年	○	141	「明治44年、名実ともに村民全体の神社とするため札幌神社から開拓神大国魂命の御霊代を迎え、また会津藩祖保科正之公の霊位を加えて増祀した。」
6『札幌の寺社』	1986年	○	68	「会津藩出身者と協議の結果、明治44年札幌神社より大国主大神の分霊を奉載、会津旧藩祖保科正之公の神霊をも配祀」
7『新札幌市史』	1991年	×		祭神についての記述なし
8『北海道神社庁誌』	1999年	○	242	「平成6年旧会津藩(福島県)藩祖保科正之公、土津霊神を御増祀」

注：『北海道神社庁誌』は、すでに保科正之公がきちんと公認され、合祀されたあとの書である。

出所：各書より作成

も祀れなかった。入植から36年もの間懇願していた保科正之公を祀るという思いは、大国主大神を合祀する際の明治44年(1911)に一緒に合祀されたと思込まれていただけであった。

琴似屯田兵の子孫が語った回顧録にも、琴似神社に保科正之が合祀されたことを前提に「藩祖は仲良く神社に納まっているのに仙台藩の子どもと会津藩の子どもはよくけんかした。[会津のサムライ、腰抜け侍。刀抜くとて腰抜けた。][仙台のドン五里、大酒飲み]、とお互いにやりあっていた。」(山田1983:101)という語りが残る。

これらは、琴似兵村に居住する屯田兵の「保科正之が合祀されている」という誤認が、その後深く信じられ、歴史の真実とまでなったことの表れと考えられる。

では、どうしてこのような誤解が80年近くも続いたのだろうか。第1表に挙げた琴似神社の記載のある書から分かることは、会津藩からの入植者が郷里の藩祖を祀りたいと嘆願し、その

願いは明治44年(1911)に認められたかのように思われていたこと、その後も歴史書の思い違いの記載からあたかも保科正之を合祀したかのように認識されていたことであり、また、琴似神社の宮司自身も自社の祭神について拘泥がなかった⁵⁾といえる。

4) 明治44年(1911)に大国主大神の合祀とともに保科正之を合祀したかの認識は、どこからでたのかを解明するために、当時の新聞である北海タイムス(北海道毎日新聞)の明治44年(1911)に発行された1月から12月の記事を洗ってみたが、神社に関する記述は札幌神社の祭りが大々的に取り上げられているだけで、琴似神社に関する記述はなく、当時の世情からはその確証には至らなかった。

5) 北海道の公認神社を網羅している『北海道神社誌』(1971年発行)は北海道神社庁が監修しており、あとがきにある神社庁の関係者一覧表の教化委員の欄には、当時の琴似神社宮司菅原正氏の名を見つけることができる。自社の祭神の記載について「天照大神」とある。これについて思うところがあったのか確認することは出来ないが、保科正之公だけではなく、琴似神社の創始のきっかけである主祭神伊達成実公の記載までもがないのは疑問である。第2次世界大戦後、宗教法人法に基づき神社の届けをする際、認可を得るために天照大神を主祭神とする神社が多く見られるが、その影響が琴似神社でもあったと推察できる。

琴似神社の祭神について、旧会津藩士に対して、それが道庁側の作為であったと考えるのは憶測でしかない。これについて、「一説には、戊辰戦争で朝敵となった会津藩祖を合祀する事に、薩長出身の北海道長官が強く反対したとも伝えられている。」(塩谷2001:44)ともいわれている。

これらのことから、琴似兵村に入植した宮城亘理藩の藩士とは異なり、藩祖を祀ることは「叶っていなかった」という事実が分かる。入植から明治44年(1911)まで、そして平成の世に至るまで旧会津藩士は戊辰戦争の罪を背負っていた。時代を変革させる戦いの結果は、勝者がその後の歴史の主導者となり、敗者はその後の生活に相当の弊害をもたらされたといえる。

しかしながら、明治末期において、琴似兵村における琴似神社の動向そのものに関していえば、旧会津藩士は、藩祖を祀りたいという行動を起こし、藩祖を合祀した(とされていた)神社を敬っていた。その思いは、入植から30年余り経過してから、やっと起こすことができた行動であった。すなわち、会津藩への帰属意識を内に秘めながら開拓と北の守りに従事する日々の生活を送っていた。会津藩に対しての帰属意識を明治末期に至るまで根底にもっていたことがいえるであろう。

4、江別兵村における神社

現在の行政区において、江別市に江別兵村(近隣に分村である篠津兵村)、野幌兵村が形成された。本稿では江別地域に形成された屯田兵村の有り様を把握したうえで、特に江別兵村を取り上げ、旧会津藩士が多く入植した屯田兵村との違いはあるのかを明確にしていきたい。

江別兵村には、明治11年(1878)から屯田兵が入植を開始した。初期は琴似兵村の第一大隊に所属する分隊であったが、明治14年(1881)

になると、北側に篠津兵村が成立し、江別兵村、篠津兵村を合わせて第一大隊第三中隊として成立した。さらに、明治18年(1885)から野幌兵村に屯田兵が入植を開始し、明治20年(1887)には、それらを総括して江別に第三大隊が置かれ、江別、篠津がその第一中隊、野幌は第二中隊となった(江別市郷土資料館編1996:21)。

江別兵村には、明治11年(1878)を皮切り⁶⁾に、明治17年(1884)、明治18年(1885)、明治19年(1886)の4期に分けて入植している。明治17年(1884)までは、東北地方の士族に対して屯田兵の募集が行われたが、明治18年(1885)の入植からは、陸軍省の屯田兵条例に基づき、募集を全国各府県に通達した。このため、江別兵村では、明治17年(1884)年までは東北地方の士族が入植し、明治18年(1885)からは、九州、中国、北陸地方の士族が入植している。入植者の出身地を第2表に付記する。

青森県出身として旧会津藩士が入植したかは、屯田兵名簿には青森士族としての記載しかないので、その判別を正確にするのは困難であることをあらかじめ断っておかねばならない。また、篠津兵村は東北地方出身者と九州・中国・北陸地方出身者、野幌兵村は九州・中国・北陸地方

6) 明治12年(1879)～明治16年(1883)に入植者がいないのは、黒田清隆内閣顧問が、屯田兵制度とは別に「移住士族取扱規則」を施行し、岩見沢(札幌県)、木古内(函館県)、鳥取(根室県)の地に新たに士族授産を目的として移住させたためである。これについて、「開拓使廃止問題と絡んで屯田兵召致を不可能にさせたと思われる。屯田兵制度の当初における入植計画が実施の段階で、適切な処置に欠く点があったらしく、屯田兵入植は一時にせよ、鎖された。」(伊藤1979:75)との見解がなされている。

7) 篠津兵村には、篠津神社が鎮座しているが、この神社は篠津屯田兵が望郷の念が募る余り、篠津川に入水するものが多かったため、鎮魂のため水天宮を祀ったのが始まりである(江別市篠津自治会編1971:584)。野幌兵村には、錦山神社が鎮座しているが、創始については江別地域の地方史に諸説あり、錦山神社の宮司に話を聞くと、神社の先代から言い伝えられている由緒について、正確な記録が残っていないという。この分析は他稿に譲る。

第2表：江別兵村入植者出身県

江別兵村入植者(160人)					
出身地	明治11年	明治17年	明治18年	明治19年	合計
岩手	10				10
福島		20			20
山形		18			18
秋田		14			14
青森		10			10
宮城		1			1
石川		1	5		6
道内		14	13		27
鹿児島			6		6
佐賀			8		8
熊本			7		7
鳥取			6	14	20
山口				3	3
広島				11	11
計	10	78	45	28	160

出所：伊藤廣『屯田兵村の百年』本文より作成



写真2 「江別神社 拝殿」

江別駅から数分先の小高い丘に鎮座している。

出身者のみの屯田兵で構成されている⁷⁾。

さて、江別兵村には江別神社が鎮座している。(写真2) 江別神社の由緒についてであるが、『北海道神社庁誌』には「熊本県より屯田兵の守護神として加藤清正公を飛鳥山に奉斎し、明治24年出雲大社より大国主大神、明治28年現在の鎮座地(萩ヶ岡)へ、大正4年大正天皇の即位記念として社殿を造営、天照大神を主祭神とする。」(北海道神社庁編1999:254)とある。萩ヶ岡に鎮座している神社は、兵屋配置図をみると、屯田兵村の中心である。一見すると、琴似神社と同様に藩に由来する神社を祀っていたかのようである。

だが、江別地域の地域史研究である『江別兵村史』(昭和39年〔1964〕)、『江別市史』(昭和40年〔1965〕)、『江別屯田兵村史』(昭和57年〔1982〕)などの書を比較すると、創立期の祭神や明治期に行われた移築等の記録について、それぞれ異なった由緒が書かれている。各書を参考にして整理・作成したのが、第3表である。

本稿では、明治23年(1890)に録上された「飛鳥山神社創立源由書并例祭録事」による記録を基に考察する。神官であった田頭和左衛門⁸⁾が書き留めた文書⁹⁾である。これによると、今まで江別地域に伝えられていた江別神社の由緒が異なることに気づく。創立期の祭神や移築年が一新されるのである。

すなわち、創立年は明治23年(1890)であり、上記の記録には創立期の祭神に関して「天照大神」と書かれている。発起人としては、9名の氏名が記されてある。だが、「陸軍屯田兵少佐正七位勲五等野崎貞次、陸軍屯田兵大尉正七位勲六等久木田直道」などのような人々が発起人となっており、その発起人を江別兵村への入植者名簿から見つけることはできない。つまり、江別兵村における神社は、明治政府から派遣されてきた大隊本部の幹部による発起であったのである。

同記録によると、明治23年(1890)3月17日

8) 天保14年(1843)11月23日、安芸国で広島藩士の子として生まれた。明治19年(1886)、18歳になった長男馬太郎を屯田兵とし、江別兵村最終年度に入植した屯田兵の家族として渡道した。和左衛門は、渡道前の明治9年(1876)から国学を伊勢神宮広島本部長藤井稜威から学んでおり、明治17(1884)に神風講社周施係の命を受けていた。渡道して4年後、神風講社4等教師の資格を得て、開拓途上の北海道の神社の創立や祭事に深く関わった。

9) 君尹彦氏が「田頭和左衛門文書」全133点の目録を作成しているが、記録の内容についてはこれまで触れられてはいない。平成17年(2005年)5月に『新江別市史』が刊行され、江別神社についてこの文書を利用して少し触れてはいるが、その記述は表面だけのもので、くわしい分析はなされていない。道立図書館での請求記号はHM919である。

第3表：江別神社についての記述の比較

各書籍名	発行年	頁	創立年と起源	移転した年
1『江別兵村史』	1964年	532	明治25年 戸長役場の記録に「明治25年9月9日飛鳥山神社発社」とあることからこの日を起源とする。	明治25年 戸長役場の記録により萩ヶ岡に移転した。
2『江別市史』	1965年	643	明治19年 各屯田兵の父である広島県人田頭和左右衛門と鳥取県人真木直真が築造。真木が持ってきた出雲大社大国大神を祀ったのが起源。	明治25年 戸長役場の記録により萩ヶ岡に移転した。
3『江別屯田兵村史』	1982年	533	明治19年 広島屯田兵田頭和左右衛門と鳥取屯田兵真木愛治が築造。田頭が持ってきた出雲大社大国大神を祀ったのが起源。	明治24年 真木愛治からの聞き取り(本隊本部移転のため被服庫を譲り受ける)により萩ヶ岡に移転した。
5『北海道神社庁誌』	1999年	254	明治24年 熊本県より屯田兵の守護として加藤清正公を飛鳥山に奉斎したことが起源。明治24年に出雲大社より大国大神を祀り、大正4年に主祭神天照大神を祀る。	明治28年 萩ヶ岡に移転した。
6 江別神社ホームページ	2005年現在		明治18年 熊本県よりの屯田兵が加藤清正を飛鳥山に奉斎したのが起源。明治24年に出雲大社より分霊し、大正4年に天照大神を主祭神にした。	明治28年 萩ヶ岡に移転した。

注1：大国主大神が祭神となった端緒について、それまで「田頭が出雲大社から大国主命の分身を受けて祭神とした。」(江別市役所編1964:532)と伝えられていた。『江別兵村史』が書かれた昭和39年(1964)当時、祭神の由緒についての記録が何もなく、その当時、江別神社宮司や屯田兵2世の古老からの「田頭の父が宮造大工であったので、屯田に神社がなくはという話が持ち上がり、飛鳥山付近の「キワダ」の木を選定して一年がかりで築造した。」という伝承に基づき田頭自身が祭神を設けた、とされていた。しかし、のちの『江別屯田兵村史』(昭和57年(1982))には、「実の処、真木の父が特参した祭神を祀った」ことが確認され、現状では、祭神は鳥取県出身の真木直真によるものとされている。その確信となった証拠については書かれていない。

注2：明治44年(1911)に発行された江別地域の最初の地方史である『北海道札幌郡江別村史』にある神社についての記述は、江別地域に明治19年(1886)に入植した北越植民社が勧請した「野幌神社」のみの記述しかない。

出所：各書より作成

より屯田兵幹部より神社建築の議がなされ、同年5月30日に地鎮祭が執行され、7月3日に落成棟札が納められた。8月28日の項には「遙拝所斎神天照大御神ト定ム。社名ヲ飛鳥山神社ト定ムナリ」とある。そして、9月15日から3日間大祭式が行われ、餅撒・競馬・相撲等の奉納があり、屯田兵村を守護する神社としての機能を果たしていくこととなったのである。

では、これまで言い伝えられてきた「大国主大神」「加藤清正公」はいつから合祀され、祭神となったのであろうか。まず、「大国主大神」についての記録は明治24年(1891)の項にみられる。(以下に挙げる史料すべてについて、傍線句読点は筆者が付記したものである。)

一、明治廿四年八月十九日廿日、両日村祭執行ス。

一、同年五月ヨリ真木直真氏内地へ向ケ旅行ノ所、同年八月一日帰村。出雲國大

社ノ御分霊ヲ拝載大社教權少講議拜命。右同日帰村ニ付、合殿ニ納ムトシテ、同十九日午前十一時仮遷宮右大社御分霊エ合テ伊勢國神宮本院ヨリ、皇大御神御分霊移シテ合テ拝載ノ由、同人ヨリ物語リアルニヨリ念ノ爲、同年九月廿二日附ヲ以テ本院エ向ケ伺出ス。同年十月二日附ヲ以テ回答アリ [本院トハ伊勢國宇治神宮教本院也]。書面ニ依レハ、本院ニ於テ御分霊等授與候儀ハ決テ無之候有云々。尤右大國主神御分霊ハ同祭後、手尽ニ真木氏宅へ同人持帰ル。

この文書を見ると、明治24年(1891)に真木直真¹⁰⁾が内地へ旅行の際、大国大神を分霊してきたことがわかる。そして、伊勢神宮の皇大神

10) 明治19年(1886)に鳥取県から入植した屯田兵真木愛治の父である。

と大国主大神の分霊を飛鳥山神社へ合祀することを望んだが、それは叶えられず祭神を自宅へ持ち帰っている。そして、下記に示す記録をみると、翌年に大国大神を合祀する建議が再びなされたことがわかる。その際に桜井三郎¹¹⁾らが持参していた「加藤清正公」の合祀についての記録もみられる。

一、明治二十五年九月九日ヲ本年村祭日ト會員申合ノ上定右ニ付兵村會員中ノ内信徒総代トシテ桜井三郎倉敷傳三郎二氏也。該二氏九月七日自家ニ来リ示談ニ曰、真木直真氏所持ノ大社ノ御分霊ヲ當飛鳥山神社エ當村祭ノ際、再遷宮致度由ニ付、雙方云々依頼ニ應ス。且ツ村祭ニ當リ、真木氏エモ會員一統ヨリ祭官ニ依頼ノ由、就テハ同氏モ村祭々典式列席アリ。並肥後國熊本市綿山神社^(ママ)¹²⁾御分像桜井三郎氏外數名ニテ当地エ持来シヲ同相遷ス〔加藤清正公ノ像〕ナリ。

これにより、明治25年(1892)に「大国主大神」「加藤清正公」が祭神として合祀されたことが明らかになった。また、神社移転については、明治26年(1892)8月8日から建議¹³⁾がなされた。

そして、同年8月25日に「一、社名飛鳥山神社ト称シタルヲ今回移轉ニ付江別神社ト協議々快^(ママ)(決)ス。依テ本祭ヨリ江別神社ト改正相称ス。」との記録から屯田兵村の中心地への神社移転と同時に、現在の呼称である「江別神社」と命名された。

江別神社についての歴史を見直してきた。この動向をみるに、江別神社の発祥は屯田兵大隊本部が村の遥拝所として勸請を勧めた神社であり、のちに合祀された祭神は屯田兵が個人的に持ち込んだ神であった。つまり、士族出身者のみで構成された江別兵村ではあるが、琴似神社のような藩主を祀った神社ではなかった。加え

て、はじめの入植年から12年を経過して勸請された鎮守のカミであった。琴似兵村は戊辰戦争に敗北した東北出身者のみの士族で構成されたが、江別兵村は東北・九州・中国・北陸地方の士族で構成されている。出身地が全国各地ということは、各藩の団結や藩へ帰属意識が薄かったといえる。

しかしながら、江別兵村の定着率は、明治44年(1911)当時の記録に、江別59.4%、篠津55% (関、桑原1980:46)とあり、屯田兵村として半数以上の屯田兵が定着したことは珍しい。つまり、明治期を生きていく精神的支柱として、江別兵村に入植した屯田兵は、中央集権的な天皇制統一国家の現れである伊勢神宮遥拝所を心のよりどころとしたのであって、祭神の在り方からは、琴似兵村の屯田兵、特に旧会津藩士のような藩へ固執した帰属意識はみられなかった。

11) 明治18年(1885)に熊本県から入植した屯田兵桜井広太郎の父である。

12) 「綿山神社」という記載であるが、これは「錦山神社」の誤りであると思われる。錦山神社は、明治4年(1872)に熊本城内に創建された。現在は改称され「加藤神社」と称している。祭神は、豊臣秀吉の家臣として活躍した加藤清正であり、この時代に肥後国を領地として拝領した。加藤家は寛永9年(1632)に改易され、代わって細川家が廃藩置県が行われるまで藩主として君臨した。つまり、加藤清正は藩祖というより、熊本出身の英雄という認識であった。錦山神社の創立年は明治であり、幕末期には「加藤清正を祀る神社を崇拜する藩士」の姿はなかった。

13) この遷宮の際に、飛鳥山神社の祭神は市街地に居住する澤谷富蔵宅に仮宮された。その記録には、「於是ニ大社御分霊澤谷ニ残置キ、昨廿五年大社教管長巡教ノ際、市街地へ授與ニナリタル大社御神符ヲ遷ス事ニ決議ス。大社御分霊ハ右一統ヨリ真木へ書面ヲ遺シ真木受取方手續ス。依テ同廿七日真木澤谷方ヨリ持帰ル。」とあり、江別神社に祀られている大国主大神は、最初は真木が直接持ち込んだものであったが、その後大社教官長が巡教の際に授かった神符を合祀したことがわかる。この文書から、現在の江別神社の祭神の経緯に関する説明そのものが覆される。

5、おわりに

本稿では、屯田兵となった士族の帰属意識について、屯田兵村に勧請された神社の祭神に注目して分析を行った。

旧会津藩士が集団で入植した琴似兵村における神社と旧会津藩士が集団で入植していない江別兵村の神社の祭神を分析することで、琴似兵村の屯田兵は、特異な行動として入植と同時に「藩祖を開拓地に祀る」という行動を起こしたことがわかった。これは、会津藩のみならず、宮城亘理藩の出身者にもいえることである。戊辰戦争で藩が敗北したという歴史は藩への反発になることなく、他藩出身の屯田兵よりも自分の「藩」に対する意識が強かったということであろう。

そして、特に旧会津藩士に注目すると、琴似兵村では藩祖を祀りたくても実際には祀れていなかったが、意識としては保科正之公を慕いそこに帰属していた。本稿では触れなかったが、琴似兵村と同じく旧会津藩士が多く入植した山鼻兵村では、西南戦争で旧薩摩藩を破ることで、戊辰戦争での汚名を晴らしたという意識が強く、戦没者を奉った札幌護国神社を戦いに勝利した名誉を称え鎮守のカミとしていた。旧会津藩士の精神的支柱である藩祖への忠誠、藩への帰属意識は近代国家形成期を生きていくうえで重要な位置を占めており、それを日々の生活の糧へと変化させたのである。

また、明治末期に至るまで藩祖に拘っていたことは「解体された」ことへの反動も深く関わっているのではないかとも思われる。しかし、屯田兵として活躍したもののなかには、会津藩士であったものが多い。

屯田兵の幹部は旧薩摩藩、旧長州藩の出身者が中心であったと一般的にみられているが、「琴似屯田の52戸は会津藩士の人々である。而して琴似屯田より11名の将校を出した内9名は

会津藩士の人である。亦明治9年山鼻兵村に移住した第2の屯田兵村には、会津出身は54名、その内7名の将校を出して居り……」（山田1944：172～173）という記録が残っている。屯田兵の将校には、幕末期に会津藩の中核を担っていた藩士も加わっており、屯田兵の中核を支えていた。つまり、その反動は明治政府に対する反発だけでなかったのである。

屯田兵は、対ロシアという対外関係に経験のあるものを登用しなければならなかった。幕末期に会津藩は北方警備の任務にあった功績がある。そこで、北の守りを随行するために、屯田兵の指導者の中核を担う役目を旧会津藩士は果たしていたのである。そこから、「指導者」として屯田兵の機構をよりよくさせようとする責任感が、「会津藩士であった」という自尊心の延長上に存在したといえよう。

そして、「会津藩士であった」という誇りは、平成の世になっても会津藩士たちの子孫に受け継がれ、先祖を偲ぶことで子孫たちの先祖の土地への帰属意識を形成する一要因となっている。琴似屯田子孫会が年1回発行している会報の第15号に、屯田兵の孫である相川清氏が「開拓使は会津藩士らの屯田兵応募を拒否し、青森県知事などの取り計らいで出身地を青森として琴似に入植されたが、会津出身を秘匿してまで応募せざるを得なかったご先祖が、郷里を転々と追われるが如くに、遠く北海道に来てまでも朝敵、賊軍、会津降伏人などと差別されて記録されていた。……ひたすら[屯田兵としての使命]を頑固なまでに耐えていたと、そんなように思えてくるのである。琴似には有形の財産を何一つとして留めていないが、その子孫が[無形の家督]を受け継いでいるのではないか。」（琴似屯田子孫会編2001：5）と書いている。

「無形の家督」とは、柳田國男が「先祖の話」のなかで「しばしば滅失の危険にさらされる有

形の財産よりも、むしろかほどまでに親密であった先祖と子孫の者との間の交感を、できるだけ具体的に知っているほうが、どのくらい家の永続に役立つか知れない。それを無形の家督と呼ぶ。」(柳田1990:34~35)といていることを指すのであろう。故郷を離れ北海道という土地においても、会津藩士は朝敵・賊軍といわれていた。しかし、会津藩士であったという帰属意識を持つことで、現代においても自らの出身を誇りにするという無形の家督を子孫に伝えることができたといえるのではないだろうか。

近代国家形成期は、会津藩士にとって桎梏の世であった。しかし、戊辰戦争での敗北による滅藩後、北海道へ屯田兵として入植したものを中心として考察したなかで、「新天地」においても精神的支柱として、かつての藩へ帰属意識を持ちながら、近代化に順応し、国家を形づくるために開拓に携わりながら、遅く生きていったことが神社の祭神を通じてみてとれたのではないだろうか。

屯田兵村は北海道各地に及んでいる。本稿では札幌周辺に形成された第一大隊と第三大隊である屯田兵村に入植した屯田兵を中心に考察したため、今後の課題として、第二大隊として根室地域に形成された屯田兵村に入植した屯田兵と神社の関係を調査し比較したい。士族の帰属意識が明治中期から後期と時を経てどのように変化していったのかということ、神社というものに着目して明確にしたいと考えている。

引用文献

- 石光真人編1971『ある明治人の記録—会津人柴五郎の遺書』中公新書
 伊藤廣1979『屯田兵村の百年』上巻 北海道新聞社
 猪苗代町編1982『猪苗代町史歴史編』猪苗代町史出版委員会
 江別市郷土資料館編1996『江別市郷土資料館解説

- 集録』江別市教育委員会
 江別市篠津自治会編1971『篠津屯田兵村史』江別市篠津自治会
 琴似屯田子孫会編2001『琴似屯田子孫会会報』第15号
 琴似屯田百年史編纂委員会編1974『琴似屯田百年史』琴似屯田百年記念事業期成会
 琴似兵村五十年記念会編1924『琴似兵村誌』琴似兵村五十年記念会
 札幌市編1956『琴似町史』札幌市
 札幌市編1985『さっぽろ文庫33屯田兵』札幌市教育委員会文化資料室
 札幌市編1986『さっぽろ文庫39札幌の寺社』札幌市教育委員会文化資料室
 札幌市編1991『新札幌市史』第2巻通史2 札幌市
 塩谷七重郎2001「北海道開拓に尽くした会津藩士三家」『歴史春秋』第53号 pp.19~50
 関秀志、桑原真人1980「野幌屯田兵村の社会構造について[屯田兵々籍簿]の分析」『北海道開拓記念館調査報告』第19号 pp.39~48
 田頭和左衛門1890「飛鳥山神社創立源由書并例祭録事」北海道立図書館所蔵
 北海道神社庁編1971『北海道神社誌』北海道神社庁
 北海道神社庁編1999『北海道神社庁誌』北海道神社庁
 増田忠二郎1962「屯田兵村における集落形態の諸問題」『人文地理』14-6 pp.90~101
 三浦泰之2000「海を渡ってきた武士たち—士族授産」『北海道開拓記念館常設展示解説書4近代のはじまり』北海道開拓記念館 pp.31~40
 柳田國男1990「先祖の話」『柳田國男全集』13巻 筑摩書房 pp.7~210
 山田勝伴1944『開拓使最初の屯田兵—琴似兵村』正文舎
 山田信子1983「開拓使最初の屯田兵」『北海道を探る』第3号 北海道みんぞく文化研究会 pp.95~112

本稿を作成するにあたり、現地調査で新國辰男氏・菅原正文氏（琴似兵村）、佐々木孝一氏（江別兵村）には大変お世話になりました。ま

た昭和女子大学の田畑久夫先生、渡辺伸夫先生に御指導頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

（えんどう ゆきこ 生活機構学専攻2年）

受理年月日 平成17年9月30日

審査終了日 平成17年12月1日